

社会を変える力を生み出す 協同労働・よい仕事とは何か

田中 羊子 (センター事業団前理事長・特別相談役)

(1) センター事業団の再出発にあたって

2023年6月、労働者協同組合法人として新たな出発を決意した総代会の直後に、センター事業団を揺るがす事態に直面した。学童クラブ等のいくつかの子育ち現場で、深刻な人員不足を背景に日々の人員体制について不適正な報告がなされ、そのことを通して利用者や地域、行政からの社会的信頼を失い、400人の仲間の働く場と14億の事業を失うという、あってはならない事態だ。

7つの原則がありながら、なぜこのようなことを起こしてしまったのか。

労協法が施行され、さあこれからというときに、なぜこんなことになったのか。

自らを問い続ける苦しい日々を、多くの仲間たちと共に過ごした。そして、自分たちがやってきたこと、これからやろうとしていたことが何だったのかを何度もふり返り、深く問うたが故に行きついたことがある。それは、1人ひとりの組合員が本当に主権者だといえるセンター事業団は、どうしたらつくれるのか。そのために、私たちの生命線である「よい仕事」と「全組合員経営」(話し合い)にあらためて徹底して光をあて、この2つを根底から深めていこうということ。

(2) 仲間の日々のよい仕事に光をあて 共に深めていきたいこと

今回の事態から、現場の仲間の日々のよい仕事の奮闘に光をあててきたのか、その苦労やがんばりに心をよせ、そこから学び、励ますことを第一においてきたのかが問われた。

また、専門性を高めたい、自分たちのよい仕事に自信や確固たる根拠を持って地域に発信したいという声がよせられている。「専門性を高める」とはどういうことなのか。

●「よい仕事」と「地域づくり」はどうつながるのか

「子どもたちがより充実した時間を過ごすために、毎日苦心惨憺しているが、『それだけではダメだ』『あたりまえだ』『もっと地域のために』…と言われると、この組織の中で達成感は得られない」。こうした仲間の声を、どう受けとめたいのだろうか。

「今、地域で何が起きていて、子どもや保護者は何に困っているのか、学童保育だからこそ、日々の生活のすみずみまで見えるものがある。そして困難や課題のみならず、子どもたちの声が聴こえるような実践経験を記録し、地域に発信す

る必要がある。今、学童保育だけで抱えている悩みや行きづまりを、保護者や地域に伝えて一緒に考える。そして子どもが自信と希望を持てる地域を共につくっていく。これが学童支援員の専門性ではないか。実践現場で知る現実と自らの実践の意味を家族、地域や社会の課題と結び付けて理解すること。それを学童保育から地域社会に発信する力量をつけていくことが求められている。(北海道大学名誉教授 宮崎隆志先生)

私たちの痛切な反省は、「困っているなら私たちに相談してほしい」「共同体になりえていなかったことに、一関係者として責任を痛感している」という保護者たちの声だ。よい仕事という「窓」から見える様々な困難や矛盾を、地域や社会全体の課題と結び付けて理解する。そして問いを立て、ニーズを把握する力(専門性)を深め、自分たちで抱え込むのではなく地域、社会みんなの問題として発信し、多くの人々とつながって共に解決に取り組み、社会を変える力にしていきたい。

● 「よい仕事」と「協同労働」の働き方はどうつながるのだろう

「この仕事をやりたくて入団した。現場の仕事だけではなく、協同労働を伝えていく仕事を押しつけられている感じがする」。この仲間の声を、どう受けとめたいのだろうか。

「学童保育とは、『子どもたちが放課後の生活を自分たちでつくりあげていく場

所』だ。皆さんの学童クラブが子どもにとっての『ホーム』になっている。ルールで縛るのではなく、みんなで作る場、人への信頼を築きあげる場所になっている。子どもを1人の対等な人間として、相手の人格の独立性に敬意を持ちながら向き合っている。だから子どもたちは自分の言葉を聴いてくれる人、受けとめてくれる人、応答できる存在として皆さんを認めている。対話して『じゃあやってみようか』と活動をつくり出せる。これは、協同労働の働き方と一緒にではないか。みんなで話し合っ、対等な立場で聴き合っ、一緒につくろう…これは皆さんが大事にしている学童観とほぼ一緒ではないか。(同上)」

自らが大事にしている「よい仕事」の価値と、「協同労働」の働き方がどのようにつながっているのか。自分たちのよい仕事は、どういう働き方があるから実現できているのか、1人ひとりが自分の言葉を持つということ。この根本の問いを、仲間と共に深めていきたい。

(3) あきらめやおまかせをこえて～

一人ひとりが立ちあがる力に

利用者や地域、働く仲間の力を信じ、相手を心から思いやる「よい仕事」と「話し合い」をとことん探求する。その実践を通した組合員一人ひとりの変化・成長が、今困難の中にある誰かにとっての大切な支えとなり、そこに信頼と希望が生まれ、人が立ち上がる力を生み、それが社会を変える力となり、連鎖していくよ

うな役割を果たせるセンター事業団になりたい。いや、すでに清掃や物流の現場から、子育てやケアの現場から、幾人もの仲間達はその役割を果たしているのではないか。

そして、事業所の仲間たちの生き生きと働く姿、語る言葉が地域と共鳴し、この人たち、この働き方、この組織とだったら自分の思いを実現できるかもしれない…。そんな思いを持つ人たちが、よい仕事とよい働き方を求めて仲間となり、協同労働を生かし、共に仕事おこし、地域づくりに挑戦し、自分たちの手で社会

を変える動きを次々と生み出せるようなセンター事業団の未来を創っていきたい。

大きくつまずいた今だからこそ、みんなで切り拓いてきた実践の価値を確かめ合い、明らかになった弱点や課題にとことん向き合い、必ず成長のバネにしていく。そして一層困難を極める社会を、あきらめやおまかせをこえて自分たちの手で変えていくために、ケアと自治を地域に育むような「よい仕事」と「話し合い」の基礎体力をつけ、労協法を力に、協同労働が社会に根づいていくための土台をしっかりと築いていきたい。